

灰原茂雄さんを偲ぶ

社会通信社

灰原茂雄さんを偲ぶ

もくじ

■巻頭言■

現役の皆さんに負けないように

—灰原茂雄さん講演から(二〇〇〇年一月一九日)—

三池と向坂教室

滝野 忠……………2

国鉄反合研の発足と国労函館大会

石河 康国……………3

国鉄反合研から地域反合研へ

渡辺 和彦……………4

全電通闘争 そして全電通反合研

宮坂 要……………5

総評時代には面識はなかったけれど

野村 一……………6

まるまると太った労大手帳

大木 五郎……………7

労研センター結成そして国労修善寺大会

松永 裕方……………8

「ある手紙」

稲村 守……………9

劉少奇論文と書き込み

濱崎 忠晃……………10

懐かしい楽しい語らい

三木 信之介……………11

年賀状「復活」

松里 福慈……………11

「暗夜打破」

松枝 佳宏……………12

社会主義革命と社会革命

稲葉 耕一……………13

「君たちはわかっていないよ」

河野 康臣……………14

遺稿『主権在民』

樋口 俊士……………15

「階級的」ということ

福田 実……………16

歩いてもみたい道

浜田 嘉彦……………17

やさしい笑顔と謙虚な態度

早田 昌二郎……………18

ゆるぎない労働者への信頼

稲石 馨……………19

確信と全力投球

今村 稔……………21

これからですよ

金平 博……………22

私の「宝物」

木島 正道……………23

現代の「長期抵抗・統一路線」

小林 隆……………24

『旬刊社会通信No.七六五・七六六・七六七・七六八号より』

滝野 忠……………25

一九七七年二月一〇日第三種郵便物認可

発行所 社会通信社 発行人 滝野 忠

東京都渋谷区本町六丁目二八の二コーポル幡ヶ谷九〇四 電話(03)337714649

FAX(03)329915367

振替 〇〇一〇〇一九一五八四三一 労金 東京労金本店 No.1154163

購読料 月額 600円 6ヵ月前納制

〈もくじ〉

特集・灰原茂雄さんを偲ぶ

■巻頭言■

現役の皆さんに負けないように

灰原茂雄さん講演から(二〇〇〇年一月一九日)

三池と向坂教室

国鉄反合研の発足と国労函館大会

国鉄反合研から地域反合研へ

全電通闘争そして全電通反合研

総評時代には面識はなかったけれど

まるまると太った労大手帳

労研センター結成そして国労修善寺大会

「ある手紙」

劉少奇論文と書き込み

懐かしい楽しい語らい

年賀状「復活」

「暗夜打破」

社会主義革命と社会革命

「君たちはわかっていないよ」

遺稿『主権在民』

..... 2

石河 康国..... 3

渡辺 和彦..... 4

宮坂 要..... 5

野村 一..... 6

大木 五郎..... 7

松永 裕方..... 8

稲村 守..... 9

濱崎 忠晃..... 10

三木 信之介..... 11

松里 福慈..... 11

松枝 佳宏..... 12

稲葉 耕一..... 13

河野 康臣..... 14

樋口 俊士..... 15

福田 実..... 16

旬刊 社会通信

NO. 766

二〇〇〇年四月二一日号

二〇〇〇年四月二一日発行
(毎月一日・二一日・三一日三回発行)

現役の皆さんに負けないように

〔灰原茂雄さん講演から（二〇〇〇年一月一九日）〕

日本労働運動の大先輩・灰原茂雄氏がなくなられた。二〇〇〇年三月一日、八十四歳。灰原さんは敵にはむろん、味方にも身体ごとぶつかっていく人だった。気迫の人である。鶴のような容姿で、鷹のような鋭さを終生お持ちであった。灰原さんの葬儀の日、私鉄京成の宮川敏一さんからパンフレットを手渡された。『三池闘争・C〇闘争から学ぶもの』（A5版三〇頁）と題され、灰原さんが二〇〇〇年一月一九日、新しくなった京成労働会館で、「千葉C〇共闘会議再建集会に寄せて」の講演録である。じつに練られている。

同パンフから、灰原さんらしい一節を紹介し、この特集号の巻頭の言にしたい。

「今、私は八四歳ですが、今年の四月七日には八十五歳になります。現役ではありませんが、現役の皆さんに負けないように、学習もしていますし皆さんと色々と交流もしています。そういう意味でちよっとお話をしたいことがあるのですが、まず第一に安保条約、一九六〇年五月一九日に岸内閣の強行採決で押し切られ、反対闘争が空前の高まりとなった過程で、三池は一月二五日から無期限ストに突入したのですが、結果として三三日のストライキをやったわけですが、一歩後退しました。

後退しましたが最後まで抵抗し、一二〇〇名の仲間の指名解雇に反対して、炭労全体の統一ストにもならないで後退したわけです。そういう苦い経験もありましたから、今、状況はどうかというところご承知の通り、今日の新聞でも憲法改正についての院内の委員会もできました。安保と結合して闘った三池闘争で、少なくとも階級的な闘いは総評を中心にして、安保、三池だけではなくその後も闘ってきました。春闘もしかりであります。皆さんの私鉄総連の闘いもありました。

だけど今日ですね、ご承知の通り連合の幹部の皆さんは、雇用さえ守ってくれば賃金はどうでも良いかと、そのようにいい方を含めて、今年もスト無し春闘に終わりそうですが、雇用を守るといっても、これだけ自殺者が多いとか、大変な労働強化で強制的な退職合意など大変な状況になっています。

雇用を守れば良いといっても、相手がそのようなことを守るはずがないんですね。首切り合理化、リストラは世界中ですから、アメリカを含めてそのようなときに、雇用さえ守れば賃上げはどうでも良いとか。あるいは、賃金の一部を後回しにするとか、そういうことがいろいろ出ています。こういうときに憲法自体が危ない。連合は闘う姿勢をなかなか持てない。あるいは、社会党も連合政権に加入した以後、いろいろ後退をしている。社会党の中から新社会党ができて頑張っています、ご承知の通り国会にはまだ一人もいない。今度の国会解散で一歩前に出るために頑張っています。そういう状態の中で、労働組合は意気消沈している。」

※『三池闘争・C〇闘争から学ぶもの』（A5版三〇頁）◇内容―長期抵抗統一路線、資本主義は労働者の権利を認めない、三川鉦の大爆発、人間を大事にしろ・憲法を守れ

◇編集発行 千葉C〇共闘会議事務局 宮川敏一（千葉県習志野市津田沼三一六一三九 京成労組電車支部内）◇お問い合わせ先電話 〇四七四一七六一―二四三

三池と向坂教室

1
灰原さんに草創期の三池労働運動を語らせると、ほんとうにうれしそうに、持ち出すのが黄色くなった二枚のざら紙だった。ふれば粉末となりそうなその紙を、灰原さんは積み重ねた書類の山から、大事そうに手品のように取り出すのだった。なにしろ灰原さんの住家はうさぎ小屋みたようだったから貴重な資料もこうしてつまれる他なかったのだ。

さてその二枚は「三池政治文化研究会」のガリ刷りの資料である。鉄道省で技術屋をしていた弱冠二十九歳の青年は、敗戦で職を失い、新婚のハマ夫人の郷里の三池で開墾をしていたが、ひよんなことから三池鉱山に勤めることになった。戦争へのうらみを胸に民主主義のいぶきに触れて青年灰原は地域の文化サークルに参加した。それが三池政治文化研究会だった。そして灰原さんは研究会席上で生涯の師・向坂逸郎と初めて対面したのである。四七年一月一九日のことであった。

戦後民主主義の青嵐と向坂逸郎とのあいこの場となったこの研究会は、灰原さんのルーツなのである。二枚のざら紙は灰原さんのお宝なのだった。

2
意欲的な青年はすぐに三池労組内でも頭角を現わした。当時はまだ御用組合であったが、人民解放の機運に触発された活動分子がおのずから気脈を通じあい固まりだしていた。灰原さんを組合支部役員に引っ張り出したのは終生の名コンビとなった塚元敦義さんだった（昨年十一月に灰原さんは熊本の塚元さんを尋ね肝胆てらし語りあったのだが、そのすぐ後で塚元さんが急逝されるとは夢にも思わなかった）。そして、灰原さんの紹介で向坂先生を招き三池労組の本所支部研究会が発足し、向坂教室に発展していったのである。灰原さんにはもうひとつお宝がある。向坂先生からの五〇年から六五年にかけての五〇通以上の運動指導の書簡である。「最重要」とかかれたボール箱におさめられ、今は主のいなくなった部屋の一番目立つところにおかれている。

灰原さんは自分の誕生日、五一年四月七日に左派社会党に入党した。三池労組内に社会党はあったが、ボスの集まりみたような集団で、灰原さんたち向坂教室のメンバーは入党しなかった。社会党が分裂して初めて入党したのである。また当時結成された社会主義協会にも参加し、その初期からの同人となった。

3
灰原さんがその指導性を発揮したのは五二年末の「六三闘争」（炭労・電産の賃金闘争）であった。闘いの総括である「闘争自己批判書」を起草し炭労内にその名が知れわたったのである。灰原さんとはかく「総括」を大事にした。この、向坂先生仕込みと思われる態度も、終生変わらなかつた。「六三闘争」を契機に三池労組は一段と組織が強くなり、向坂教室のメンバーが要職に就くこととなった。そして、灰原さんも五三年五月に三池労組の上部組織たる「三鉱連」の事務局長に着任。しばらく東京暮らしとなった。大好きな向坂先生のそばにいられたこともあって楽しかったという。

灰原さんは三鉱連事務局長として五三年の「英雄なき113日の闘い」を指導した。

この大闘争は、一八四一人もの解雇を撤回させたことで、総評全体の注目を浴びた。灰原さんらしく徹底的な総括を行い『英雄なき113日の闘い』という単行本にまとめあげた。本書はきちんとした闘争総括文としては戦後最初の物で、今でも古書店では一万円近い値がつくこともある。灰原さんは講演会に行くときはいつも三色以上の書き込みとアンダーラインのあるポロポロの本書をカバンにいれてもち歩いていた。

灰原さんは資本に対しまことに精力的に追い討ちをかけた。五五年の「経営方針変革闘争」である。灰原さんはこの闘いの意義を、「113日闘争」「六〇年三池闘争」におとらぬくらい私たちに熱っぽく語っていた。あまり知られていない闘いだから、特に知らせなかったのだろう。晩年になるにつれ、あらゆる機会に語っていたように思う。労資協議での「協議・決定権」まで確認させた、企業別労働組合としてはギリギリまで経営権に切り込んだこの闘いはたしかに日本労働運動の最高の到達点であつたらう。

ところで、灰原さんが「経営方針変革闘争」について突っ込んで語るとき、よく塚元さんとの議論について触れたものだ。この話は、二つの優れた個性の切磋琢磨の様をみるように弁証法の生きた勉強になった。東京で上部機関指導者として政治的に広い視野で資本に挑んだ灰原さんに対して、現地の実力者・塚元さんは「経営方針変革闘争」の成果を資本が逆手に取ることを心配した。両人の間ではたびたび議論がかわされた。二人の議論を紹介するとき灰原さんは、後に三鉦連が足元をすくわれた点では塚元さんの指摘もあつてしたが、それでもなお、「経営方針変革闘争」は画期的な闘いだつたと、熱っぽく語つたものだ。そんな灰原さんの、負けん気の子供のようなところも、みんなに好かれたのだつた。

こうして全国的指導者として鍛錬された灰原さんは、五八年八月、五年にわたる三鉦連事務局長を退任。三池労組書記長として大牟田に帰ってきた。その灰原さんを待ち受けたのは、歴史的な三池闘争であつた。今ごろ天国で向坂先生と三池闘争の思い出話にふけているだろう。その話の輪に加われる日を楽しみに、筆を置く。（東京・石河 康国）

「国鉄反合研」の発足と国労函館大会

ここ十数年に及んで労働運動の主力は活力を喪失して、再生への契機も見いだせないまま無為にすぎている。この間、独占資本は主にリストラ攻撃で労働者を分断し、競争社会こそ正義であるかのように労働者・勤労国民を洗脳し、雇用や賃金さらに権利までも破壊し尽くして、優位な資本と従属した労働者の新たな労資関係を再構築しようとする国家権力を総動員して全力を上げている。

灰原茂雄さんは生涯の後半生で、この資本の論理を自らの永い労働運動の経験と科学的社会主義思想にもとづいて分析・解明して、労働者の資本に対する思想と行動の論理を、平易な言葉で講演や論文で発表して、労働者の共感と活動家への成長を訴えてきた。いま労働運動に開眼し活動家となった者の多くが、灰原さんに直にふれたとか、講演を聴いたとか、著作によって指針を与えられた云つても過言ではない。

国鉄労働組合にあつては、灰原さんの薫陶を得た者はとくに多い。中央労働学校講師としてだけでなく、はるか前から灰原さんの提唱と指導によって「国鉄反合理化研究会」が

国労東京地本館内および関東ブロックの職場活動家や青年労働者を中心に組織された。この反合研は組織されたとはいえ、特別に規約や会費をもうけたり、会員を登録したわけではない。また当時の民同といわれた主力幹部に対する反幹部闘争のための組織でもない。

反合研では人間らしく生きるために、働き続ける職場をつくる権利を確立すること。労働条件を良くすること。労働者が団結し連帯することの意味を、職場実態や労働者の生活や意識の状況を話しあったり、交流することであった。発足した時期は国鉄当局による「国鉄生産性向上運動」が職場労使関係を悪化させ、国労分裂攻撃が執拗に繰り返された時期であったので、反合研での自由な話し合いや交流は、職場で活動家が確信をもって団結と連帯を訴えたり、反マル生闘争の全国的な拡がりや理論武装に大きく貢献した。

灰原さんは、月例会にもっとも熱心に出席された。社会主義協会代表の向坂逸郎先生も高齢にもかかわらず真夜中まで、にこにこしながら参加者の職場の話や世間話につき合ってくれた。そして、お酒の交流へと進む頃合いに、自宅に戻れることが常であった。灰原さんは酒宴につき合い、泊まり込んでくれた。反合研では定期全国大会に合わせ、全国反合研を開催した。代議員と傍聴者の合同交流である。灰原さんはこの交流会を楽しみにし皆勤であった。反合研が全国に波及し、国労運動に大きな影響力を持つようになったのは、発足まもない国労の函館大会の初日の社会党員協での、反合研メンバーの反マル生闘争への決起と反撃の訴えであった。その気迫は中川委員長の「座して死を待つより、起って反撃を」の決意表明に結実した。

それから三〇年間、国鉄労働組合は国鉄解体、国労破壊の第二臨調・民営化攻撃と厳しい闘いの連続である。そしていま国労の存亡が問われている状況で、責任ある立場にいるのは反合研で学び、活動家から国労中央・地方機関の幹部となっている人々である。灰原さんの真の教訓をどれだけ生かしされるのか。灰原さんが後る髪を引かれる思いがあるとすれば、国労と国鉄（JR）労働者の将来だろうと思う。

国鉄に生き、国労で育った者として、灰原さんから学んだ人間としての生き方、活動家としての責務をいま一度反芻しなければならぬと、灰原さんの遺影の前で自問自答したのは私だけではないと思う。

（神奈川・渡辺 和彦）

国鉄反合研から地域反合研へ

今は亡き灰原さんと闘魂は、階級的労働運動の再生・強化をめざす仲間達の中に脈々として生き続けている。

灰原さんにお会いしたのは、一九七一年三月、国鉄反合研が発足した時だった。それまでは、一九六〇年の三池闘争現地を含めて、壇上から演説する灰原さんや社会主義誌上の論文等から、非常に厳格な闘志という印象が強かったように思う。しかし、お会いしてみると柔和な話し方と細やかな気配り、そして謙虚な人柄で、以前の先入観を訂正しなければならなかったことを覚えている。もちろん、労働運動、社会主義運動の原則にかかわる議論になると、少しのあいまいさも許さない確固とした信念と説得力をもった理論展開となる。

国鉄反合研は、国鉄「マル生」攻撃との熾烈なたたかひのなかで生まれた。国鉄「マル

生」は、日本生産性本部の直接・間接の指導のもとに行われた国鉄における本格的な生産性向上運動であり、激しい洗脳教育と不当労働行為によって国鉄組織を破壊しようとするものであった。国鉄反合研は、反「マル生」闘争を前進させる原動力となり、また、階級的労働運動をめざす新しい国労綱領の制定にも寄与するなど大きな成果をあげてきた。

毎月一回、泊まり込みの中央反合研は、午後七時から深夜まで続いたが、灰原さんは、向坂先生とともに毎回出席し、夜十二時頃向坂先生が帰られた後も朝三時過ぎまで交流会に参加された。

灰原さんは、一九七三年四月から連載で「社会通信」の前進である「旬刊進路」誌上に「『反合研』運動について―その中間的総括として―」を執筆され、反合研運動の意義について詳細に述べられている。その中で、「労働運動の階級的強化を具体的にかちとるための、運動論の一つとして」反合研運動を位置づけ、「『反合理化』闘争を重視するかまえば、まず何よりも前提となります」として、反合研運動二年間の総括と展望が示されている。国鉄反合研は、東京・関東を中心とした中央反合研の他に、全国各地にも反合研が結成され、その活動家集団が修善寺全国大会を乗り越え、今日の国鉄闘争を担っているといっても過言ではない。

反合研運動は、一単組や企業別労働組合にとどまることなく、「階級的視点で同志的団結」をかちとることをめざし、全通、全電通、専売、私鉄そして自治労（都職労）などへ拡がっていった。

また、灰原さんは、産業別の反合研の他に「地域反合研」の重要性を指摘され積極的な働きかけを行ってきた。その結果、山梨においても「地域反合研」が結成され、多くの成果をあげた。最初は「社会主義」読者会として結集し、灰原さんの強い勧めもあり、九つの労組・県労連（県評）、党県本部、社青同などの仲間達によって、「山梨県反合研」が発足した。「自分が所属する労働組合だけの運動に終わっている弱点を克服し、闘争経験を交流する」ことを基本に、山梨における労働組合や党・社青同の強化に貢献した。

反合研の他にも灰原さんには山梨へ足を運んでいただいた。労大まなぶの講演会や、国労のストライキ中の支部全員学習会など数多くの講演をお願いした。一九七一年秋、社会主義協会山梨支部発足の際、向坂先生とともに甲府へみえられたことを昨日のことに鮮明に記憶している。

灰原さんの超人的な活動を振り返り、その信念を引き継ぎ、階級的労働運動の再生・前進のために、そして、科学的社会主義の党強化のために努力しなければと思う。

（山梨・宮坂 要）

全電通闘争　そして全電通反合研

戦後労働運動の歴史において、労農派マルクス主義の思想と融合した労働運動を一貫として追求し、日本労働運動に大きな影響を与え、日本独占総体を震撼させてきたのは三池労働運動である。その労働運動を実践しながら多くの労働者と共に闘い、歩んできた偉大な指導者である灰原茂雄氏（元三池労組書記長）が永眠された。

灰原さんと全電通反合理化研究会との出会いは、国鉄反マル生闘争が闘われていた一九

七一年二月に炭労会館において全電通反合理化研究会を創立した時からである。その時以来、二九年間という長期間にわたりご指導をいただいた。

とくに、一九七四年千葉電通闘争から始まった全電通闘争においては、故向坂先生との二人三脚で苦闘を強いられながらも闘い続けている労働者ひとり一人に激励を行い、闘っている労働者の心情を大切にしながら三池労働運動で闘い識った内容を全電通闘争の内容とすりあわせながら具体的に提起され、常に「現象的には、全電通闘争は全電通労組との闘いと内部闘争に考えられているが、全電通反合研のみなさんの闘いは、本質的には独占資本が全電通労組を巻き込んだ攻撃に対する闘いであり、階級闘争である」と闘いの意義を明確にされ、「全電通反合研のみなさんの闘いに、独占資本と全電通がしゃかりきに、執拗に攻撃を加えてきているネライは、社会主義革命という思想に裏打ちされた反合理化闘争路線だからであり、この反合理化闘争が全労働者階級に拡がることに危機意識を持っているからである。三池闘争の時も、労農派マルクス主義への攻撃であった。みなさんが人間らしく働き生き続けるために闘い続けるという思想を問題にしてきているのである。したがって、みなさんの闘いは労働者階級にとつては正当な闘いである」と、無我夢中で闘っているわれわれ労働者に闘いの本質をわかり易く語られ、学習と闘いの中で若い労働者が一歩一歩と成長していく姿を温かく見守りながら、そのつど指導された。

いい指導者のもとに全電通闘争を闘い、闘いの中で訓練され、鍛えられた全電通反合研の同志、仲間、仲間は、「長期抵抗・統一路線」を自らの路線として据え、闘い識った教訓を踏まえながら、新社会党をはじめ階級的労働運動の再構築に向けて、さまざまな職場、地域で献身的に闘い続けている。

(千葉・野村 一)

総評時代には面識はなかつたけれど

灰原さんが亡くなられたということ仲間から知らせをうけたとき、まさに愕然として「ついになくなつたか、残念至極だけど、冥福を祈りましょう」と考えたことです。

しかし「そんな気楽なことではないのか」ともう一人の自分に叱られたわけです。そして灰原さんと共に生きた時代、教えられたことや文章をもう一度思いかえし、読みなおして、労働大学でがんばっている青年労働者諸君に報告し伝えるべき任務が残されていると思えました。その大事な文献は、次のものです。

『闘い学ぶ仲間たち』(灰原茂雄論文集・一九九〇年社会主義協会出版局刊)

『階級的労働運動の構築』(拙著・電通反合研一九七六年刊)

これらの重要な課題はまさに今日の労働運動に欠けている職場闘争です。私が全電通書記長や総評常任幹事をやっていた時代は三池の灰原さんの高名は聞いていたのですが、直接の面識はなかつたわけです。それで全電通労組千葉県支部委員長になってから労働大学講師であった灰原さんと熱烈に交流をはじめました。

そして三池労組の運動について深く学ぶところがありました。私と千葉県支部ではこれを職場の活動家にひろめ実践し、みるみるうちに団結がつよまり全国的に注目されるようになりました。それだけ三池労組の運動には魅力的な、そして感動的なことがつらなっているのです。

その基調は、総評の元事務局長・岩井氏と灰原さんの対談に、「基本にあるのは差別をなくす、人間を解放するということです。モノトリのな延長線での職場闘争とはちがうわけです」(『闘い学ぶ仲間たち』二七七頁)。労働者を上役が呼び捨てにしていることに反撃して「さんづけ闘争」をやり、炭鉱に入る前に神棚を拜むことの強制に対して、『ウチのオカミさんを拜めば弁当のおかずがよくなるのに、この神様に何のごりやくがあるのかと反撃して信教の自由をつらぬいたのです。』職場の民主化闘争というのは、このような当たり前のことから始めるものだと思つて「指導とはもつと当たり前の、たれでもわかるもの」であるべきだと三池労組の大衆闘争路線から学びました。

右記、大木著書には総評綱領草案が原文のまま全部入れてあります。その「あとがき」(二二七頁)の言葉をあらためて紹介します。

「日本資本主義の搾取構造は労働運動の一つの型の経験的成長を長く許しておけるほど、おおらかなものでなく、職場闘争に対して地域的階級連帯に対しても、産業別統一闘争に対しても、かれらの応じうる幅は狭く、しかもどこかで突破されれば―中略―叩きつぶしに来ることを承知の上で運動を進めなければならない」。

(千葉・大木 五郎)

まるまると太った労大手帳

灰原さんは約二〇年間、社会主義協会本部の専従者として活躍されました。この間、七〇年代初めの躍進、七七年の協会攻撃、そして八〇年代の党、労働運動の全般的な後退という文字通り激動の時期を、私は灰原さんの下で働かせていただいたわけです。

二〇年間という長い期間でしたが、事務局で共にする時間は意外に少なかったような気がします。それだけ灰原さんが、東奔西走されていたということ。それこそ驚くほどの過密スケジュールで、健康を害するのではないかと気を揉んだものでした。直接頼まれると、どんなに無理な日程でも決して断らないのが灰原さんでしたから、代理がきかない以上、組織部(後に学習部)で日程を管理すべきではないかと、真剣に考えたものでした。しかし、協会の会議だけでなく、反合研や、社青同、労大の学習会・講演会などが多く、これを協会事務局だけで規制するなどというのはそもそも出来ない話でした。灰原さんは、協会活動を狭く考えるのではなく、社青同や労大と緊密に結びつきつつ、労働者階級のかなかに影響力を拡大することだとして、文字通り身を削ってこられたのだと思います。

今でも時々思い出すのは、灰原さんのまるまると太った分厚い労大手帳です。日程を手帳に書き込むだけでは足らなかつたからです。メモ用紙などを挟んだ労大手帳は、普通の輪ゴムでは間に合わず、大きな太目のものが必需品でした。時にふざけて太目の輪ゴムを「贈呈」したのですが、*ありがとう*、*ありがとう*、*ありがとう*と、まるで大切な物もらつたときのように言われ、その時の笑顔を忘れることはできません。

向坂先生が、灰原さんは人の良さでどんな人をも説得してしまう、という趣旨の話をされたことを記憶しています。人間としての信頼がなくして人をオルグすることはできないというのが、先生の教えの一つでしたが、灰原さんはそれを身をもって私たちに示してくれていました。そして、闘いの現場に足を運んで相談にのり、指導されました。この姿勢で貫かれていたからこそ、妥協が必要な時に皆を説得することができたのだと思います。

日本労働運動に名を残す大先輩を、灰原さんなどとなれなれしく言っているのか迷いましたが、そのお人柄は、そうお呼びするほかにないのです。今でもどこかで、片手を挙げて、「やあ、元気」と声をかけられそうな気がします。(神奈川・松永 裕方)

労研センター結成そして国労修善寺大会

私が京都総評オルグとして今もあるのは、総評解散と労戦の右翼再編に反対して闘った労研センターの活動に参加したからである。その中心にあった故・岩井章さんの理論について私は正直なところ最初迷いがあった。ヨーロッパの労働運動の紹介などをさかんに岩井さんがされていて、職場で進む右傾化攻撃に利用されるのではないかという懸念からだ。後になって私の不勉強であることが明らかとなるのだが、決定づけたのは七八年春に京都のまなぶ講演会で灰原さんを招いたときその翌日、京都の日本社会党内左派でついていた「五月会」で岩井さんに来ていただくというお話をしたら、灰原さんが「それは良かった。岩井さんは、今、私たちと最も一致した考えで運動されてるんですよ」と言われた。社会党の一総支部の小さな市会議員候補の事務所での「講師を囲む会」でのこと。それで迷いはすっかりふつきれ、八十年五月十九日に京都で初の左派結集の岩井講演会を開催し、労戦問題に岩井さんと一体になって突入していくこととなった。

以降、灰原さんは京都の私たちの歩みをじっくりご覧になりながら、常に激励を与えられた。その八十年秋にも社会主義協会京都府支部主催で春と同じ場所の、京都労働者総合会館ホールで五百人規模の「右傾化に抗して」講演会を成功させた年末、「夜明け前の光りをめざして共に闘う」とサイン入りで著書『階級的労働運動の課題』を贈呈いただいた。八二年春の反自民自主投票を決め込んだ当時の社会党府本部に対して、左派結集をして京都府知事選挙を闘っていた最中、「またとない新婚の今を大へんな『知事選闘争』を含めて頑張っておられる」と過分な激励のお手紙。八二年十二月二日には、「労戦『統一』に本気で立ち向かっているあなたのことを思い出しながら十七日の『労研センター準備会』の呼びかけ人の一人として参加しました。なつかしい林大鳳さんと隣り合わせで固い握手をしました。」とのお便りに励まされ、翌八三年五月、動労本部委員長であったその林さんを担いで、京都で全国初の地方労研センター結成へと至る。

その林さんが急速に右傾化する動労本部からの軋轢と闘いながら志半ばで急逝され、追悼集会と第一回労研センター全国交流集会を八四年十月に京都で開催したとき、『京都集会』は大成功でした。後日もっとみんなでその成果を確認することになります。」とのお便りをただちにいただいた。

労戦問題も見据えて国鉄闘争を京都で初めて本格的に開始した八六年十月十九日の立山学氏を招いた国労修善寺大会報告集会の翌日には、朝から職場に「きのうの参加者はどれくらいでしたか？」と電話をいただき、超満員で成功したことをお話すると「それはよかったですね」と、手放しでわがことのように喜ばれた。その後岩井さんを招いた大集会をもったり、「京都からのアピール」を発売しての国鉄最後の日・八七年三月三十一日の京都駅前八千人のヒューマンチェインへと結実していく。その間も、私が八三年春の京都府園部町町長選挙で対立候補・野中一二三陣営(自民党野中幹事長代理の弟)に妻と一緒に襲

撃されるという事件のときには、「ケガはどうですか。闘いはこれからですからどうか、若いあなたは体を大切にしてください。：モロゾフの甘いものを少々お送りしました。奥さんとあがつてください」との気配りをいただいた。

灰原さんは「私は、労戦（労研センター）にしても、社会党内論争（「新宣言」、国鉄法案「民営的手法・分割反対」）にしても、左派の十分な力がまったく発揮されていないことを大変くやしく思っています」（八六・六、北海道のM先輩）という私たちのような悶もんとしていた当時の左派内若手活動家のすべてを見通し、心から励まされた。

それから、日本労働運動史に輝く六十年三池闘争のあと、三池労組書記長を後進に譲って社会主義協会の専従になられたとき、全国の活動家録を作られたこと（私の名前も載っていた！）、私の部落問題への質問にも真つ正面から答えられ「労農派は土着の社会主義だ」と高橋貞樹著『被差別部落一千年史』を贈呈していただき、その著者と山川均さんと の面識を紹介されたことなど語り尽くせない。

九七年のまだ寒い時分、岩井章さんのお葬式でお会いし、その後国労の三人の同志と一緒に伊豆半島の温泉に入り、露天風呂で語り合ったのがゆっくりしたお話の最後となった。そのときW氏が「記念写真を撮っておけば良かったな」と別れた後で言ったが、もう果たせない。同年十一月一日の『社会通信』二十周年記念のつどいで、衆院議席奪還めざして今奮闘中の岡崎宏美さんと三人で握手して撮ってもらった写真が最後のものとなった。

（滋賀・稲村 守）

「ある手紙」

「逝去と彼岸に知らせかけめぐる」

「まさしく人生の手本であった灰原さんのありし日を偲び、ご冥福をお祈りいたします」と弔電を打った。数日前、増田豊さんからの便りに「灰原さんが胃潰瘍で明一五日手術をされます。高齢だけに少し心配しています」と書いてあり少々気掛かりであったが、本当に驚いた。

時々、分厚い手紙をいただいた。時には便箋七、八枚にほとばしる言葉が独特な文字でぎっしり詰まっている。手紙には補強の言葉が数カ所は必ず書き加えられている。念のため、ある手紙を取り出して補強箇所を数えてみたら二〇数カ所もあった。数カ所に赤線も引いてある。僕だったら一度書いて「まあ、この位でいいや」とそのままにするのであるが、何度も読み返されているのであろう。納得がいくまで、くり返し追求する姿こそ灰原さんの生きざまそのものであったように思われる。これほど個性表現した文章もめずらしい。『口管』（ひたすら）こそ僕の中にある灰原さんの強烈なイメージである。太文字のペンで只管主張されたのである。その太字用の太いペンMONTEBLANCを僕も灰原さんから載っている。今、そのペンでこの文章を書いている。

手紙の中味は「長期抵抗・統一路線」をはじめとする多くの著作、会議や総会の発言の中に終始貫かれています。三池闘争を基調にして、反合理化闘争、学習闘争、民主主義の徹底、平和革命などを骨子にした労農派の思想である。

「あなたや私たちには、ともかく、分裂、攻撃の経験と組織づくりという貴重な体験が

あるわけですが、それにしても『総評解体が社会党の変質へとつづく眼前の攻防のすさまじさは格別のもの』、しかもそれは、まさに世界史的な一環ですね。」と書かれているように炭労と電産には、資本の分裂攻勢に挑む共通した闘争課題があったので、より灰原論文に共鳴するところが大きかった。

かれこれ一〇年前にもなるうか、灰原夫妻を松江市に招き、若い人たちと共に「囲む会」を開いたことがある。奥さんが語られた灰原さんの家庭での素顔などを、はにかみ笑いしながら聞いておられた姿が懐かしく思い出される。その時に、奥さんが初めて飛行機に乗っていたいへん喜ばれたと書かれた礼状が届いた時には微笑ましく思ったものである。

近年、革新運動の高揚期をつくり出された諸先輩が次々とご長逝される報に接し、人生の機微を思うこの頃である。

(島根・濱崎 忠晃)

劉少奇論文と書き込み

手元に灰原さんからいただいた劉少奇の「大衆組織の根本問題」のコピーがあります。コピーには灰原さんが三池労組と共に歩むなかで何度も読みかえした跡、書きこみと傍線が数多く記入されており、なかでも「一九六三年八月二七日灰原」の記載は灰原さんがどんな思いでこの小さなパンフをお読みになったか感慨深いものがあります。

この時期は「安保と三池」の闘いから二年。三池労組は「長期抵抗闘争統一路線」を確立し職場からの反撃の準備すすめておりますが、日本労働運動総体は国労などいくつかの組合を除いて職場闘争路線から後退をはじめております。さらにこの年の十一月九日、三川鉦第一斜抗で炭じん大爆発が発生し一瞬にして四百五十八名の死者と八〇〇名にのぼる一酸化炭素中毒患を出し、多く労働者が今なお苦しみつづけています。六三年八月とはそんな時期でこの時の灰原さんの心境は向坂先生との往復書簡集「向坂教室と三池」にくわしい。灰原さんは多忙の中を東武労組東上支部反合研や川越の社会主義読者会に出席してくれました。社会党川越総支部での学習会のとき外で騒ぐ者いて私がカーテンを閉めると、灰原さんに「カーテンは明けておきなさい。外から見ると云うことはこちらからも騒ぐ者を監視できると云うことです」と注意されました。一寸したことです。深く考えさせられました。大衆組織の根本問題の一節から――

「民衆とは人間の集まりであって、思想をもち、要求をもっている能動的な人間の集まりである。民衆はけっして木や石でもなければ、機械でもない。したがって民衆を組織するには、木や石を組みたてたり、機械を組みたてるのとはちがった方法をもちなければならない。つまり民衆をまったく被動的なものとして、すき勝手に組織することはできないのであって、民衆の自発性にもとづいて民衆を自からたち上げさせ、組織しなければならない。」

(東京・三木 信之介)

懐かしい楽しい語らい

仕事から帰って来て、灰原さんの訃報に接し、深い深い悲しい気持ちでいっぱいです。

「団結・抵抗・統一」三池労組の「長期抵抗統一路線」を堅持し、反合理化・首切り撤

回闘争を国鉄闘争と固く結合し、まさに国労闘争団をはじめとする全国の争議団とともに、灰原茂雄さんは「解雇撤回闘争」をその先頭になって闘ってきました。

内外情勢が極めて複雑に変化する中にも、「科学的社会主義」の思想と立場を常に鮮明にされてきました。灰原茂雄さんは、当時の「社会党」への猛烈な解体策動に対して、全国の同志とともに「反独占・社会主義」の旗を守るために献身努力され、結果としてその基本路線を継承していく「新社会党の結成」に尽力され活動を続けてこられました。本心に心より敬意を表します。

私にとっては、「社青同」の育成・労組青年部運動の強化をはじめ、とりわけ「学習活動の定着」のために、かつまた、中央・地方の「反合研（反合理化研究会）運動」の推進とくに「国鉄北海道反合研」の中心ともいえる「総会・政治学校」については、全国をオクルグされての多忙な日程を割いてたびたびの御出席の上、貴重なる「講演」（問題提起）・助言を下されたこと等々、まさに身を命を賭して心篤き御指導をいただいたことを終生忘れることはできません。

今からちょうど七年前・一九九二年九月二十二日に滝野嘉津子さん（社会通信社）と樋口俊士さん（当時は「連帯する会」の事務局）の案内で、久し振りに灰原茂雄さん御夫妻の自宅を訪ねて五人が「懐かしい語らい（涙もあり）」をすることが出来ました。しかし、その日が、今となつては灰原茂雄さん（二〇〇〇年三月十八日・八十四歳）とハマ子さん（一九九六年十月三十一日・七十八歳）御夫妻と私との最後の出会いとなつてしまいました。（札幌・松里 福慈）

年賀状「復活」

灰原さんと最初に会ったのいつか、思い出せない。七〇年代初め、神戸から帰京されるのに駅まで見送ったことがある。新幹線から降りた客の中に、灰原さんの知人―三池出身者がいた。非常に親しげに、何年ぶりかと声を交わされたが、乗降の一瞬のことだった。今ではその方の名前も覚えていないが、喫茶店へ誘い、有馬温泉で働いている、住所はここだとお話をして、灰原さんに手紙を書いた。それから、毎年年賀状を頂くようになった。年賀状といえば、虚礼廃止を思いついて出すのをやめたことがある。灰原さんにお話をすると、そんなものでしょうか、とご自分の意見を述べられたことがある。私の年賀状は復活した。ことこのように、私は灰原信奉者である。

これがあの三池争議の闘士かと疑うほど柔和な顔、そして相手の意見をよく聞きメモをとり、いつも誰にも「さん」づけで対応される。三池の話も、常に自己批判的であり、向坂さんや塚元さんをたて、誰の悪口もない。「総括を大切に」それこそ会った時に言われ、そのことには厳しかった。わが本棚には、灰原さんの本が並んでいる。何度読み返しただろう。生かしきれない自分が情けない。

「松枝さん、客観的条件と主体的条件は、どちらが規定的ですか。」

一九八〇年前後のことだ。七四年を境にして、労働運動は急速に後退していった。一所懸命、頑張っているのに、なぜ反撃の気運がつかめないのか、私たちのどこに欠陥があるのか、灰原さんに問いかけたことがある。右はその時の返事である。言葉としての意味は

わかるが、まだ難しく今なお理解できていない。しかし、肝に銘じてはいる。

印象に残っている言葉はたくさんあるが、「構えて攻撃してくる敵に対して、真正面から、メーンと打ち込んでいったら、強い相手ですから、逆に打ちのめされますよ。」灰原信奉者が、毛沢東を読むのも、その言葉の結果だ。

相手の作った土俵の上では相撲をとるな、自分たちで土俵をつくり、相手の弱点を突く。これまた、狭い視野で戦術的に考えるとひどい目に会うが、劣勢にある私たちが社会主義という戦略を見すえながら、とるべき道はあるまいか。通夜の場で棺に眠る灰原さんのお顔をみながら、「階級闘争を民主主義闘争として闘うのが労農派」ということを、涙にかえて、再決意したのである。

(兵庫・松枝 佳宏)

「暗夜打破」

灰原さんが亡くなったと知らせを受け、ショックでしずんでいると妻が「うちで夕食たべてくれたとき、食べるものすべてに『おいしい、おいしい』とほめてくれた。とも働きで、忙しいからたいしたものを出してないのに。あなたは食べものに『からい』とかいろいろ苦情を述べるけど、灰原さんは思いやりのあるえらい人だ。」と言った。そして、また、「大闘争をしてきた人だが、こんなことをやった、あんなことをやったと自慢げに話したがるものだが、自慢を言わない、ほんとにえらい人だ。」と。人間として灰原さんのすばらしさを教えられ、私は自己反省させられている。

灰原さんと夕食のあと「灰原さん、一度三池闘争の経過というか山場、山場を聞かせて下さい」とその夜話を聞いた。びっくり、何も見ないで「〇月〇日は…」と四〇年前のことをことまかく憶えているんです。「命がけで闘ってきたから、憶えているんだ」と熱っぽく約二時間しゃべってくれた。

貴重な話しだと録音してあったので、今、なつかしくそれを聞いている。八四歳とは思えぬ若さと情熱の闘志、灰原さんの肉声だ。「しゃべっているときは少しも疲れないの、戦闘的、戦闘的になるの、あと寝るだけ」、「へんにね、灰原がいばっているとか、自慢しているとか思わないことを前提にしてね、腹わってほんとうに話しをできる人はあまりいないですよ。稲葉さんは、その一人ですからね、まあ、かんべんして下さい」、「いばることはない、みんなが闘ったんですから、僕がやったんではないんだから」、「ただね、労農派に感謝します、マルクス主義にあらためて自信をもちます」。謙虚な姿勢で、同志的にいっしょけんめい語ってくれた夜のことを昨日のことのように思い出す。

実は昨年一〇月、労働運動委員会第二回総会・学習会に奈良県へ講演に来ていただいた灰原さんと私の出合いは二〇年近くのことであるが、とくに、ここ数年深いつきあいをさせてもらっていた、いろいろ学ばせてもらった。去る九八年の夏は、奈良県から七人で東京の足立区の灰原さんの自宅へおじゃまして、昼食をよばれ、話を聞かせてもらった。「教えるんじゃなくて報告です」と。一度、奈良へ来てもらおうと昨年一〇月実現したのだ。合宿だったが終日いっしょしてくれ助言をいただいた。

奈良観光したことないとのことだったので二日目午後、志賀直哉旧居、東大寺、若草山、奈良の鹿などを案内。長編小説「暗夜行路」を完成させた部屋のある志賀直哉旧居にて、

灰原さんが雑記帳に次のように記してある。

「同志稲葉耕一氏（奈良在住）にご案内を受け、初めて参観し、文豪の一人志賀直哉さんの私生活のいったんを識りえて、今もし生存されていたら『暗夜打破』とおっしゃったのでは、などと感想して辞去す。一九九九・一〇・三一・一四時一〇分三池灰原茂雄」

灰原さんの告別式に行けなかつたので、思い出して、私は志賀直哉旧居を訪れて、雑記帳を見せてもらい、灰原さんを偲んでいた。観光目的でも、もの見方（世の中の見方）が一貫している。『暗夜打破』を今こそ。

この奈良観光のあと、せまい私の家で泊まってもらったの（はじめの夕食の話）である。

（奈良・稲葉 耕一）

社会主義革命と社会革命

一昨年、九八年五月、宇佐地区平和運動センターが主催した「護憲シンポジウム」のパネラーに灰原さんをお呼びして以来、直接的なご厚誼を賜わっていました。ごく最近、新社会党本部の大崎さんら旧知の仲間と相談し「灰原さんに学ぶ会（仮称）」でもつくって、三池闘争を学びかえす学習を全国レベルでやったらいいねえ、と思いついていた矢先の訃報だっただけに、かえすがえすも残念でなりません。私は最晩年の一時期、この旧三池の闘士の恩恵を授かった一労働者としての思い出を書かせていただきたいと思えます。

宇佐でのシンポジウムの翌日、行橋市の小正路さんにお電話を差し上げ、福岡県豊津町にある『堺利彦記念館』を同行の大崎さんともども見学させていただいたことがありました。堺利彦にゆかりの書籍、書、写真等を展示したこの瀟洒（しょうしゃ）な建物の一隅に「社会革命」と揮毫（きごう）された堺先生の直筆の書が立派なガラスの額縁に納められていました。その記念館をあとにして、同じ豊津町内の小高い丘の公園にある鶴田知也、葉山嘉樹の偉業を称えたモニュメントを見学したりして、楽しいひとときを四人で過ごさせていただきました。

ご案内をしていた小正路さんにお礼を言って、宇佐に帰る道すがらの車中で、私は灰原さんに「『社会主義革命』でなくて、あの『社会革命』は何か意味があるのでしょいか」とお尋ねしたところ、ご返事の詳細は忘れましたが、「河野さん、実はねわたしもそのことをずっと考えていました」と言われました。そして、その解釈をめぐって私は「イデオロギーの革命ではない、あくまでも社会の変革＝革命なのでしょうか……」などと勝手な想像を三池の大先輩にぶつけてもみました。

その直後の灰原さんからの優しいお便りには『私も、堺先生記念館での見聞は忘れることはありえないでしょう。とにかく『社会革命』ということをめぐっては河野さんと話し合った件ですが―勉強を今からでもしますよ。』（傍点等原文のママ）と感慨深げにしたためられています。その後、お会いしたときには必ず、宇佐での盛大なシンポのこと、その夜の楽しかった交流会、そしてアノ社会革命の話題に話しが及びました。

三年弱のほんの短いご交誼でしたが、思い出、学んだことは多すぎて、今は整理が付きません。今も脳裏に焼き付いているのは灰原さんの背筋をピンと伸ばした姿勢で討論者の発言内容をメモするお姿。残念なのは「かわのさん、必ず私の家に来てください。あげた

い本があります」との約束を果たせなかったこと。全財産（通帳）が入っているとおっしゃっていただきあまり高値そうではない黒いバッグの中に携行されていた『初版本・共産党宣言（岩波文庫）』、三池パンフ『行動方針案』。その後者については幸運にも存命中に直接、灰原さんよりいただきました。

その最初のページには「夜明け前を共に闘う。一九九八・五・二三灰原茂雄」と太字の万年筆でしたためられています。思い出はつきません。

〔大分・河野 康臣（かわの やすおみ）〕

「君たちはわかっていないよ」

「あなたのお母さんに、また会いたいよ」。死を予感させた灰原さんの申し出を快諾して早田さん、石河さんと私の三人が灰原さんのお供をして木曾へ旅したのは昨年九月のことでした。

今度の旅は気休めです、本や資料は持たないで出かけてくださいと念押しし、灰原さんは珍しく軽い旅装でやってきました。旅といえど、講演やオルグ旅行に明け暮れた人でしたから、物見遊山やブラブラ旅行はなじみがなかったのでしょうか。

まだ緑の濃い季節でした。中央高速道から伊那に下り、間道伝いに中津川に入る道草に元善光寺へ参り、昼神温泉の露天風呂につかって旅の塵座を落としました。裸身の灰原さんがまるで鶴のように見えました。

その夜、佐藤光司さんの案内で中津川の居酒屋に岐阜の仲間が集いました。灰原さんのスピーチはたったの三〇分でしたから、もったいない、もったいないとこぼしたげな様子でした。翌日は、灰原さんの足元を気遣いながら葉山嘉樹の碑、藤村記念館を散歩し、昼は車屋のそばを食し、その足で多治見の天津留さんを見舞い、明るいうちに木曾の実家にくつろぎました。酔いが回り、母が席をはずすと、話題は振り子のように運動のことに戻りました。地元に住む上平淳さんが、仕事を終えてやって来たときはちょうど灰原さんと相手に「激論」の最中でした。「君たちはわかっていないよ」と灰原さんが声を荒げたのですから、「激論」と言ったのは決して誇張ではありません。いきなりそんな場面に来合させた上平さんはさぞびっくりしたことでしょう。しかし、灰原さんと私たちは、いつも隔意や他意はなぐさげずけと言いつつ合っていましたから、驚くほどのことはありません。

私が心中に灰原さんに師事したのは、七二年の社会主義講演会（社青同千代田支部主催）が機縁でした。刊行間もない『長期抵抗統一路線』の構造を解説した講演で、初めて聞く灰原さんの話は眠りこけていた私の魂を揺り動かしました。三池労働者の闘いと息づかいを活写し、時代を読み込んで階級闘争の何たるかを整然と語り、その時の鮮烈な感動が私に生きる指針となりました。

晩年の灰原さんは、奥様に先立たれて寂しそうでした。といって、知的探求心は衰えを見せず、灰原さんの胸中ではもつと奥深く響き合い、真実に理解し合える同志を渴望していました。亡くなる前に、「この春また木曾へ行きたい」と言われたのに、実現できなかったことが心残りです。末尾に独り言になります。私も幾度となく人の死に遭いましたが、無性に涙を流した人は、これまでのところ、元国労中執の村上銀市さんと灰原さんの

二人だけです。お二人とも、私のような門前小僧をも変わらず対等に遇していただきました。灰原さん、ありがとうございます。

(千葉・樋口 俊士)

遺稿『主権在民』

東京の片隅「北区」の福田事務所で、九一年の秋から一年半「三池と向坂教室」の学習会を行い始めたことが私が灰原さんの人となりを知る場となりました。そして親しくしていただいたのを機会に、厚かましくも私が支持者に月一度(約一四〇〇部)郵送・手配りしていた「個人通信」に「ご投稿」をお願いしたのが『主権在民』です。このタイトルは灰原さんがつけたものです。一回約二千字で九二年五月から九五年の六月まで約三年間三十六回続きました。

灰原さんは北区の隣の足立区の西新井本町の都営住宅にお住みで、寒い日も暑い日もバスや電車を乗り継いだりしながら、福田事務所にわざわざ原稿をお持ち下さいました。ご多忙の中、お持ち下さるので当時でも恐縮していました。しかし、「灰原さんが精魂込めた『主権在民』であった」と私が深く自覚したのはつい最近です。

それは、この『主権在民』を北区の同志が経営する「寺子屋21世紀」が一冊の本として近々発行する計画で、灰原さんは校正・あとがき等に力を尽くされ、私もこの本の経過説明を依頼され再読していました。再読し、長年学習と実践を積み重ねてきた灰原さんの「主権者としての勤労国民の成長を願う姿勢」が、また時事問題や多くの方々の発言の引用とその寸評に「灰原さんの思いと見識」が、前よりも一層ひしひしと受け止めることができましたからです。

三月七日に自宅近くの西新井病院に入院しましたが、翌日私に電話を下さり、お見舞いし十一日に少し話を伺いました。その時、話されたことは「病状は大したことがないから心配しないように」「『主権在民』という良いタイトルを付けたと思う」「いまの情勢だからこそぜひ仲間を読んでもらいたい」「いい本ができるよ」「本になる直前のものができあがったら福田さん、僕が伺えないので代わりにそれを坂牛さんにお持ちして、誠意をもって序文を依頼して欲しい」云々を聞き、灰原さんの強い思いを知ったからです(序文に關しては翌十二日ゲラと共に坂牛先生に依頼)。

このゲラは遺族の方々の希望で灰原さんと共に納棺されました。いま、私は「灰原さんの生命を『主権在民』の発行が縮めてしまったのではないか」という思いと、「灰原さんがあんなに喜んで下さって良かった」という両方の思いです。灰原さんが「歩んだ道」は私などはただ敬服するのみですが「歩もうとした道」はしっかりと受け止め、その道を行く決意です。

(東京北区議会議員 福田 実)

※『主権在民』は寺子屋21世紀叢書③として、近く発売予定。◇お問い合わせ先寺子屋21世紀(住所・東京都北区豊島六―七―一五、TEL・FAX〇三―三九一四―一一一五)まで。

編集部より ▽今号は灰原茂雄氏の追悼特集号としました。それぞれの文章に灰原さんの人柄があふれています。灰原さんは「君らに力があるのに、なぜ沈黙しているか」「力を発揮せよ」と叱咤激励しているに違いありません。力を合わせ灰原さんの期待に応えましょうよ。

▽灰原さんとの交流、想い等、編集部まで寄せて下さい。

「階級的」ということ

灰原さんの訃報が届きました。

先だって塚本さんが逝かれ、三池炭鉱自体が閉山となり、一〇八年の歴史に幕を閉じそして灰原さんが逝かれ、三池闘争がひとつの区切りを迎えたような気がします。このように言えばおそらく灰原さんにこっぴどく叱られると思います。

「労働者階級の闘いはそんなものではない。長期抵抗の意味がわかってない。階級闘争の意味がわかってないではないか。」あの優しい独特の口調が頭の上から聞こえてきそうです。

私が灰原さんと面識を持つようになったのは、社青同が再建をされて以降です。団結集会・各種の青年を中心とした学習会に講師として出席した灰原さんの話を聞き後で灰原さんを囲んでの懇談などで、話を聞くようなことでの付き合いです。

灰原さんは本等にメモを書き入れることがすごかった。何回か灰原さんがテキストとして持っていた本を覗き見たことがあります。ピツシリと書き込まれたメモには圧倒されました。読み飛ばしはの自分としては、それこそ本を読むとはどういうことか、独習とはどういうことを教えられたように思います。しかしこの真似は今だ出来ていません。

また、灰原さんは大変筆まめであつたように思います。自分も何回か手紙をもらいましたが、この手紙は単なる礼状などではありませんでした。

学習会で灰原さん自信が述べたことや、議論しあつたこと。また、会議で議論になったことなどに対する意見であるとか、灰原さん自身の考え方や今後のあり方等に対する意見、私の意見に対する指摘や示唆と言うようなことを、詳しく・細かく・丁寧に書いた手紙をもらうのです。ここまでくると最早筆まめ等というような代物ではなく、闘いそのものでした。とても真似の出来るものではありません。当然今だに出来ないわけです。あまりにもすごいことです。

灰原さんは「階級的」という言葉を本当によく使いました。単なる飾り言葉のように使う人もいますが、灰原さんのそれは、いつの時でも、どんな場合でも必ず労働者階級の立場から考え、物事を進めていくことを断固として貫いた。それは三池における指導が原点になつていたと思います。この立場から見・考えておかしい事には断じて同調しない。

闘い抜くという立場を貫いたからに他ならないと思います。それは無理やりそうしたことではなく、社会主義という科学の道を理解して歩いただけであつたと思います。

残念ながら灰原さんには「さようなら」を言わなければなりません。しかし、今日のような労働運動・政治運動のありさまを見ると、灰原さんのように、どれだけの方が歩くことができるのか、「今後の日本の社会がファシズムに席卷されるか否かが掛かっていますよ」と天国から問い掛けられているように思います。

灰原さんのようにとはとても出来そうにもありません。しかし、何時いかなる時でもそうありたいとの心掛けをもち続けることを霊前に誓い、生前のご指導に感謝しながら、お別れの言葉とさせていただきますと思います。

(高知・浜田 嘉彦)

歩いてみたい道

灰原茂雄さんが亡くなった。享年八十四歳といえればおかしくない年齢ではあるが、手術前に病院に尋ねたときの元気ぶりを思えば、あまりにも、突然のことである。

—

出会いは、一九六七年一月に社会主義協会が再建され、暗中模索の再建途上にあつた六九年、炭労事務局長を定年退任した灰原さんが協会専従に就任されてからである。

当時、国労東京地本の書記局に就職した私は、数えるほどであつた何人かの同志とともに社青同づくりに全力をあげていた。当時の社青同は、呼称は社青同でも、雑多な主張が渾然と同居し、組織も整備されてはいなかつた。各地方の社会党黨員協の青年部隊として困われ、独立して組織されていたからである。

したがって、私の活動は、身の回りの職場の仲間「まなぶ」を広げ、学習会をつくることから始まつた。そして、全国に同志を見つけることにあつた。まさに手探りの活動だつた。援助の手は、協会組織部長として全国を歩いていた灰原さんからあつた。地方から東京に帰ってくる電話があつた。「○○には、こういう人がいましたよ。連絡とつたらどうですか」という具合にある。

国労は当時、いわゆる「五万人要員合理化反対闘争」から「現場協議制度」を闘い、国鉄当局が生産性向上運動を標榜して国労組合員の思想改造と組織破壊を狙つた、いわゆるマル生攻撃に遭遇していく途上にあつた。

資本の攻撃とこれに対する労働者の闘いは、正しい働きかけがあれば、組織的な学習活動を組織する。一九六九年二月、国労会館内では向坂先生が出席された資本論研究会が発足、現場（東京地方本部）では、七一年三月、管内の活動家を結集した国鉄反合理化研究会が発足した。勉強嫌いな私は、おもに、国労反合研で指導を受けるお付き合いとなつた。

二

社会主義協会の飛躍的前進には、たんなる仲間づくりではない、理論と実践の統一を追求する組織者としての灰原さんの働き大であつた。反合研のなかでは、三池政治文化研究会以来の、向坂先生との二人三脚の活躍が復活したように活動され、たとえば社青同内の指導権の確立のように、協会組織とその影響力は飛躍的に前進した。ここでは、壮大な階級闘争という「階級間戦争」を、目の当たりにする思いたびたびだつたと記憶している。

『宣言』の独版序文に『宣言』にかかれた諸命題の究極の勝利については、マルクスはひたすら労働者階級の知的発展に信頼し、その知的発展は、共同一致の行動と討論から必然的に生まれると信じた」という一節がある。灰原さんの組織づくりは、そのための組織づくりということだったのかもしれない。

それは、仲間を信頼することから始まる。無条件信頼である。支配者の懐柔と弾圧、謀略や労働者内部の裏切りに遭遇しながら成長してき国労運動のなかにあつた私には、合点のいかぬこともあつた。階級闘争もまた戦争であり、私達自身がそういう戦術はとらなくても、支配者側やその手先達にとって常套手段であることは、今日なお、国労の仲間たちが遭遇している現実であるからだが、「気がつけば正せば良い」「とことん話し合うべきだ」という人間味溢れるものであつた。

七四春闘に結実した労働者運動の高揚と前進に寄与した協会の飛躍的發展の基礎は、社会主義協会テーゼを貫く思想と理論、会員の献身的な活動にあった。したがって、七七年の協会規制は、その根本を覆して協会の人事派閥化をすすめたために職場のまじめな活動家の信頼を失い、今日再び、再建期を迎えた。

新社会党の立ち上げや協会組織の再建には、人一倍喜んでいたのは承知のとおりだが、協会再建はまだ始まったばかりであり、悔しいといっぱいだつたのではないかと思われ。いま、ここに、目黒反合研の同志たちの小冊子に寄せた、引用の一文がある。

「大事なこと……民衆を動員せよ、民衆を組織せよ、民衆を武装させよ、これらの叫びは、全中国にひろがり、多くの人たちが民衆運動のなかに入っていく、多くの地方では、動員の委員会が組織されている。

その上、民衆を組織するための法律や命令も、たくさん公布されている。

では、大多数の民衆は、果たして充分動員され、組織されているであろうか？」一九三九年、抗日戦争の最中に劉少奇が書いた『大衆組織の根本問題』の一文ではあるが、企業内運動に埋没しがちな私たちに對する戒めの呼びかけでもあろうし、『長期抵抗・統一路線』への新たな決意を推測させる一文の紹介と思う。

足下にも及ばぬが、歩いてみたい道である。

(東京・早田 昌二郎)

『旬刊社会通信No.七六七号』

やさしい笑顔と謙虚な態度

灰原先生と最後に会ったのは、国労本部を退任する年の夏、本部にいた樋口君(今は新社会党本部)と一緒に自宅をたずねた時であった。奥さんは、私どものために美味しいお膳をつくられごちそうになり、色々と話しをしたのが最後となった。

出合いは、私が国労釧路地方本部の組織部長時代である(一九七〇年)。当時「マル生」組織破壊攻撃の第一段で、釧路鉄道管理局では、「明るい国鉄をつくる会」を画策していた時であり、地方主催の学習会においていただいたのが最初である。

これにも国労内部の党派闘争、そして社会党党员グループ内での労働運動のあり方でのぶつかり合いがあり、その当時、国労本部にいた中川新一先輩(私と同じ帯広支部の出身)から、「まなぶ」で学習することが大切で、まずもって、労働者としての物の考え方など基本的なことを学習せよとすすめられ、このことが私にとつて最初のキッカケでもあった。地方大会のたびに、中川先輩に色々教えられ気合いもいれられ、面倒も見てもらったこと、国労本部大会時にも、これらの背景の中で内部対立があつた時にも、ほんとうに細々と指導されたものである。

翌年(一九七一年)国鉄当局の組織破壊攻撃、また労働者思想洗脳教育としての「マル生」攻撃との攻防の中で、第三二回定期全国大会(函館市・一九七一年八月二四〜二八日)で中川本部委員長の「座して組織の壊滅を待つより、立って反撃に転じよう」の発言で、私も国労は全力をあげて闘う確認をし合つた時期でもある。釧路地方でも、「マル生釧路大会」が釧路局体育館で開かれる(一九七一年一〇月一五日)など連日のように各地域

で国鉄当局主導の組織破壊攻撃と国労内部の動揺が深まり、毎日これらとの攻防で走りまわって闘い、組織対策にあげられていた時でもある。

これらの闘いの中で、釧路地区労を柱に、動労、全通等との地域共闘会議をはじめて組織するなど、私共の方でも少し前進していた面もあった。灰原先生をお招きしての労働講座が数回開催されるということでもあった（一九七一一一九七二年）。学習会を終えて、居酒屋で先生を囲み、三池の闘い、全国の仲間の動きなど、私共にとって生まれて初めて聞くことばかりであり、階級闘争、学習闘争の意義と重要性、そして人間らしく生きることはを一生懸命聞いたものである。

「いつお会いしても、二元気でやっていますか、どうですか、闘いは楽しいですよ、全国に仲間がたくさんいるよ」と常に声をかけてくれ、学問とか思想とかいうものは、学校で教えられるより、闘いの中で実践の中で育つものであり、これを通して、人間が成長するものだといわれたものでした。また、労働大学の学習誌を紹介され、私は当時、組織内のオルグ（月に二〜三回）の時は、カバン一杯に「まなぶ」「労大の学習誌」をかつぎ組合員に配布し、ともに頑張ろうぜと歩いた記憶がある。そして、これが私共の尊い組織の財産ともなったものであった。

また、灰原先生から社会主義協会について話され、協会を支持して学び闘うことも大切だが、協会員になることがどれほど大切か、加入することによる君自身の人間として、労働者としての構えの違いについて教わり、社会主義協会に加入したものである。

先生は、学習会等の中で、「三池闘争」の実践をどうして、当然のように「国鉄闘争」を重視する、そしてこの「国鉄闘争」を経験しつつ、よりつよい「階級闘争路線」を構築せよ、「国鉄闘争」を反撃の条件の契機にすることを説き、「長期抵抗統一路線」を学び「持久戦」であること、彼我の力関係というものはすべて相対的なものである、それは、味方がゼロで敵が一〇〇%あるいはその逆などということは現実にはあり得ないことであると教えられたものである。そして、圧倒的多数の労働者は、必ず勝つという自信と革新を闘いの中でもつこと、もてることであるともいわれたものである。私どもは向坂先生の論文を読み、釧路地方にも向坂先生をお招きして、学習したのもこの時機であった。

またある時、灰原先生は労働者としての自覚、任務を話してくれ、その話をきいて「私は権力（資本の構造）と闘うこと。労働者同士の中で仲間を平然と、そして巧妙に裏切ることは断じて許すことは出来ないという気持ちがある」と固まりそれが確たるものになったものであった」ことを思い出す。私も少しの経験であったが、それぞれの国労機関の任務、仕事を通じ灰原先生を知ることですしはその指導を実践しようと努力したつもりであったが、しかし、今振り返るとともそのようなことはないとの実感、反省のしきりでもある。しかし、敵との闘いの中で、労働者、仲間をつくり団結し、社会の主人公は労働者であるという確信は少しも揺らぐことはない！

最後に、私にとって、灰原先生は、常に、あの優しい笑顔と、謙虚な態度、姿勢、そして、三池の闘いで経験した一貫した理論と実践で裏打ちされた不屈な精神をもとにしたご指導と、労働者としての生き方について等、ご指導をいただいたことについて、私の生涯の財産であり、宝であり、誇りである。

（釧路・稲石 馨）

『旬刊社会通信 No. 七六七号』

ゆるぎない労働者への信頼

三月一八日という日　なんとという時期になんという人を、私たちは失ったのだろうか。灰原さんが私たちに大きな遺産と宿題を残して永遠の眠りにつかれたのは、三月一八日である。この日はいうまでもなく、一二年前にパリの労働者がパリ・コムミュンという世界史上初めての労働者国家をうちたてた日である。また灰原さんが書記長として自ら陣頭指揮をとった六〇年三池闘争でいえば、この日は第二組合が結成された翌日である。灰原さんにとっては一刻一刻が忘れることのできない日々であったにちがいない。

そんな日に灰原さんが逝去されたことには、使いたい言葉ではないが、因縁めいたものを感じざるをえない。

「理論と実践の統一」の体現者　私は三池・炭労時代の灰原さんにもずいぶんお世話になっており、語らなければならぬ幾多の思い出をもっているが、灰原さんからうけた薫陶といえ、なんといっても社会主義協会時代のそれである。

私は一九七一年以来二十数年間、社会主義協会の仕事をしたが、その大部分は組織部長であった灰原さんの下であった。協会の組織部長という役職は、一九七七年の協会規制の際に学習部長と名称変えを強いられた。理論と実践の統一は組織を媒介として実現されると固く信じていた灰原さんにとっては、この名称変更は、協会の性格を歪曲しようとする攻撃であり、耐えがたいものであったにちがいない。同じ時に、協会は組織の性格規定を「マルクス・レーニン主義者の集団である」というものから「マルクス・レーニン主義を研究する集団である」と変更することを強いられたが、これも「理論と実践の統一」という協会の生命線を「研究のみ」に切り縮めてしまおうとする攻撃であった。私は灰原さんをその組織にあるかぎり「組織部長」と呼びたかつたし、心の中ではそう呼びつづけてきた。

いま私たちは、六〇年三池闘争の四〇年を迎えている。あらためて三池闘争を学ばなければならぬ時に、そのための人格的宝庫ともいふべきかけがえのない生き証人を失ったのである。

この四〇年間、三池闘争の真髄は資本家階級の憎悪の的となり、攻撃にさらされ歪曲、抹殺されようとしてきた。このことはけっして不思議なことではないが、それに加えて、偉大なたたかいがいつもそうであったように、昨日までの戦友が戦列を離れ、陣営を異にする時に、三池闘争はその都度、批判の対象とされてきた。三池闘争に対する敬意は変わらないというふりをして「電通闘争は間違いであった」「国労修善寺大会は再検討の要あり」などの表現をもって、その実、三池のたたかいを辱（はずかし）めるやり方も、今日では珍しいことではない。

三池闘争を歴史の屑籠に放りこみ、あるいはその本質を歪めようとする試みは、今後ますます強まるであろう。

全身全霊をこめた情熱的な口調で、自己批判的総括という謙虚な態度で三池闘争を語ってくれた灰原さんを失って、灰原さんの存在という強い説得力を失って、私たちがはたしてその何分の一をおぎなえるかはわからないが、いまや三池闘争はわれわれの手によって

受け継ぎ、再生していかなければならないのである。

労働者を信じて 社会主義協会に関する灰原さんの業績を一言でいえば、協会に対する労働者の信頼をつくりだし、強めたということである。

労働者をこよなく愛した人として、向坂先生と灰原さんの二人の右にでる人を私は知らない。その点で、かねがね「学者はもつと労働者的に、労働者はもつと知的に」といわれていた向坂先生と労働者の戦闘精神を燃えたたせてきた灰原さんとは、労働者を協会に惹きつけてきた絶妙なコンビであった。

「今村さん、労働者は偉いねえ」という語りかけを、私は灰原さんから何百回聞いたことだろう。「労働者は成長する」「運動とは労働者が成長することである」ということを、他人がけつして真似ることのできない人のよさで、心の底から信じきっていた人が灰原さんであった。たたかうということとを接点として灰原さんとかかわりをもった労働者で、灰原さんに対して裏切られたという思いや不信感をもった人は、一人としていないにちがいない。

国鉄や郵政労働者の反マル生闘争、電通労働者の反合理化・組合民主化闘争、国鉄分割民営化反対闘争など七〇年代、八〇年代のたたかいは、協会や単産ごとの反合研に結集した活動家によって担われたが、それら活動家の闘争意欲の支柱になったのは灰原さんであった。労働者は灰原さんを、灰原さんは労働者を、という相互の信頼と激励がそのままたかひのエネルギーとなった。戦後労働運動史の頂点をかたちづくった三池闘争の指導者という大変の権威をもっていたにもかかわらず、それをひけらかすことは全くなかった灰原さんに対して、活動家は権威に敬意を払いながらも、権威のゆえにはなく、灰原さんが示す労働者への愛情ゆえに、強く惹きつけられたのである。

社会主義協会は数回の分裂を経ながらもやがて五〇年を迎えようとしているが、七〇年代後半から八〇年代なかばにいたる十数年は、協会の歴史の中でもっとも強く労働者を惹きつけ、労働者の信頼を得た時期であったが、そのことを人格的に代表したのが、組織部長灰原茂雄さんであった。

(兵庫・今村 稔)

『旬刊社会通信No.七六八号』

揺るぎない確信と全力投球

たしか一九八一年以来であるから、二〇年ちかくになる。釧路で開催された国労全国大会での私の発言に、先生が興味を示されそれ以来、親しく助言・指導をいただけてきた。

その年の秋に私は、地方本部執行委員になり、後半の二年間は組織部・教宣部の活動を担当した事もあり、旭川でも東京の会議などでも話を聞く機会が増え親しく接するようになった。当時、私たちは春と秋に旭川管内八支部で春闘講座や討論集会を開催しており、複数の講師をお呼びして集中した取り組みを行っていた。灰原先生には、春にも秋にも旭川まで来ていただく事があり、担当する私は三、四日間、朝から夜まで行動を共にした。

行動を共にしながら助言や指導をいただいたのであるが、先生の特徴・印象は何よりも「揺るぎない確信に満ちた全力投球」の姿である。それは、講演の中の言葉や表情にあらわれ、移動や休憩時間の会話の中にもあらわれる。いつも先生は労大の赤手帳を使ってお

られ、中はメモでびっしり埋まっている。しかも、午前中から学習会の計画が入っているのには、おどろいたものである。すでに六十代の後半であったはずなのに。ある時は、ホテルに迎えに行くと「チェック・アウトを二時間近く延長してほしい」と言われる。おそらく急ぎの原稿でも書いていたのであろうと思う。

忘れられない思い出で、記憶に残っているいくつかの言葉がある。あの釧路大会のあとしばらくして地方本部にいた私に先生より電話があった。「今度出す本のまえがきに釧路での発言を引用するのでよろしく」という事であった。その後『階級的労働運動の課題』が送られてきた。岩波書店がブックレットを発刊した頃、先生より「このパンフレットは勉強になるよ」といっていただいたパンフレットがある。たしか「臨調行革」をテーマにしたものであったと思うが、以来岩波ブックレットを読み続け今年三月で五〇二号になる。「金平さん、文房具はいいものを使った方がいいよ」と言われ、もとより文房具好きの私は意を強くして相棒のあきれ顔も気にせずいいものを使うようにしている。そしてある時、「彼は立派だ。今日はじつに楽しかった。」と言われた事がある。じつにうれしそうであった。旭川での全講座を終了し、夜の食事に旭川の労働運動に大きな影響を持つ役員に同席してもらい、三人で食事をした後ホテルに向かう途中であった。当時先生は協会の役員でもあり旭川の状況を気にされていたようである。

三池闘争をはじめ三池労組に関するパンフレットや資料も多数いただいたき、会えばそのつど、必要な助言や激励など思えばこの二十年近く指導いただいた事に心より感謝している。先生が話し私が聞いている場面ばかりであるがじつに楽しい思い出である。しかし、もとより浅学非才の身、先生にははがゆかったにちがいないであろう。

人にはそれぞれ忘れられない表情がある。先生の公演中の表情、仲間の話を聞き入る表情、そして食事をしながら楽しく語らう時の表情など。しかし、私には西新井の住宅をおじやました後、バス停まで見送ってくれ、バスが発車する時のあのにこやかなやさしい表情が忘れられない。

(東京・金平 博)

『旬刊社会通信 No 七六八号』

これからですよ

「木島さん、これからですよ。お互いに頑張りましょう」。いつもお会いすると笑顔で私を勇気づけてくれました。私は、全電通闘争の末端の一労働者として長年にわたり、灰原先生のご指導を受けてきたことを感謝しております。

灰原先生から一番強い印象を受けているのは、社会の主人公である労働者とは生涯このように生きるのだよ、ということを自らの生活や運動等々の実践で示された事であります。日本労働運動史上最大、最高の三池闘争を指導され、その闘争の中から労働者階級としての路線である「長期・抵抗・統一」を提起したのも灰原先生でした。

しかし、日常の態度、その姿勢は、もの静かで奢りや偉ぶったところは微塵もありませんでした。いつも、どのようなときでもお会いするとにこやかなお顔で、そして情熱的に労働運動について長時間お話をされました。

いま、灰原先生との思い出が私の脳裏に走馬灯のように浮かんできます。「あの時は、

ああしてれば」と後悔ばかりです。

最近では、灰原先生の奥様が亡くなられてから、私たちの仲間と年一回近郊の温泉へと一緒していただきました。

昨年の秋は、茨城県土浦の方で一泊し灰原先生のお話を聞いたのですが、その時「話す時間はどのくらいですか」と問われ、一時間程度と言うと「話すことがいっぱいある二時間ほほしい」と言われました、そして立たれたまま私たちに労働運動について一生懸命にお話をしてくれました。この時も灰原先生は靴いっぱいの資料と風呂敷に包んだいろいろな本を準備されてきました。先生のこういう所を見て、遊び半分で来ていた私は痛く反省させられました。私にとってこの時が先生とじっくりお話し、また、お酒を飲んだ最後となってしまいました。

私たちは、灰原先生が生涯を通じて貫いてきた階級闘争のすべてからまなび、一歩でも近づく努力をしていくこと、理論を労働者階級としての実践に転化していくことが一番喜ばれる事であると感じていきます。

(埼玉・木島 正道)

『旬刊社会通信No七六八号』

私の「宝物」

小林 隆同志へ ともに明日を切りひらこう！

一九八〇・九・四 全通三三回全国大会 灰原 茂雄

今日ではめずらしい万年筆の文字で、力強く書かれた「労働組合運動・農民運動と統一戦線」(テーゼ第二部)が私の手元にある。

灰原さん自身は、七三年一月二十九日に購入した旨のメモも残っている。協会規制の中で、テーゼ第二部が規制され、私自身も以前購入したものを紛失し、こまっていた時、東京で開かれた全通全国大会会場で傍聴されていた灰原さんにその旨を話したら前述のメモを記した上、私にプレゼントしてくれました。

七三年の発行以来、灰原さん自身が読み返し学習されていただけに、数多くの赤線・メモも残っており、私の宝物のひとつです。

この「テーゼ第二部」は飾り物として宝物でなく、私の労働組合運動の精神的支えとしての宝物なのです。全通の長期抵抗大衆路線(全通企第一・二号)の運動展開の中で、灰原さんは私の所属する地区本部の学習に何回も見えられ、ゆっくり、わかりやすく講義をされたのが記憶に新しいのです。

自ら三井三池闘争の指導者として、身体で体験されたことに熱弁をふるわれた姿、他人の話はすべてメモをとり、静かに聞き入り、最後にも静かに話しをされる姿、長い人生観のすべてをかけたの説得力ある話しに、ついひきこまれたのは私一人ではないでしょう。昨年・今年の正月、年賀状が届かなくなって、少々心配をしていました。滝野さんからの電話にビックリしました。全通運動の右傾化の進む中、職場第一線の指導者が亡くなり残念でなりません、私と灰原さんの接点を思いおこし、ペンを取ってみました。

(全通労働者・小林 隆)

『旬刊社会通信No七六八号』

現代の「長期抵抗・統一路線」

十代の若者、第一線活動家、経験豊かなOBが集う政治研究会から、「灰原さんを偲びたい。だから、『三池闘争とこれからの労働運動』のテーマで、問題意識を語れ」との命令があった。重い課題である。逃げたかった。「滝野さん、逃げたらダメです。私に挑戦してよ」と、灰原さんの声が聞こえてくる。

灰原さんは鶴のような容姿で鷹の鋭さをもち、敵（独占資本家階級）はむろん、味方（上部機関、仲間）にも身体ごとぶつかっていく人だった。「氣迫」の人である。労働運動は、この「氣迫」が原点だ。「氣迫」とは「己の理想・確信・夢」を実現する想い、それを第三者に伝え、共感を得るみなぎるばかりの精神的発露である。

「三池闘争」についての本に改めて目を通した。『長期抵抗・統一路線』（社会主義協会刊、一九七二年七月二〇日）、『三池を語る』（灰原編著・一九八三年十月八日）、『三池と向坂教室―向坂逸郎・灰原茂雄往復書簡をめぐりて』（灰原編著・社会主義協会刊、一九八七年七月二五日）、『資料三池争議』（日経連広報部、一九六三年一月）、『日経連五十年史』（日経連刊、一九八九年十一月）等々、前三書について、灰原さんのサインがあり、それぞれ「これからも一緒に」、「夜明け前をともに闘う」、「感謝と敬意をこめて」と記されている。

灰原さんは「設計技師」であった。「設計」は無から有を産み出すことを仕事とする。創造力が問われる。私の身近にも若い設計技師がいる。どう新しい建物をつくるかの希望に燃えている。灰原さんは橋の設計から社会の設計に三池炭鉱に入ってから、その方針を変えた。後に、三池炭鉱の社長となり、三池闘争で一戦を交えた栗木氏は、灰原さんが三池労組の役員となった時、「君とはこれから敵だな」と話したという。

三池労組には多くの有為の人材がいた。しかし、労働運動の「設計技師」としての灰原ぬきには、三池闘争はなかった。『長期抵抗・統一路線』にある諸論文、そして資料として納められている『炭労・賃金闘争自己批判書』（一九五三年三月六日）、『英雄なき一三日の闘い』から―全国三井炭鉱労働組合連合会闘争白書』（一九五四年六月）、『長期抵抗路線―展望を明らかにして反撃に転ずる決意と構えを確立しよう』（一九六二年四月）は、灰原さんなくしては、構想されなかつたろうことは明らかだ。

灰原さんはつねに「次の準備」（戦略はむろん戦術）を考えた。それを、われわれに「総括することが大事」と強調した。総括とは「闘い」を反省し、次の一步をふみ出す準備である。『社会通信』の「灰原茂雄さんを偲ぶ」の特集は、灰原さんがいかに活動家の心をとらえたかについて、すべての人が書いている。われわれに欠けていたのは、灰原さんの階級的労働運動構築への「構想力」ではなかったのか。「総括が必要」をくり返すことでなく、「どう総括し、どう労働運動構築への展望」をさし示すか、灰原さんがつねにわれわれに望んだのはそのことではなからうか。

『三池闘争とこれからの労働運動』で、私はこのテーマを論じてみたいと思う。灰原さんの遺志に応える途は、現代情勢における「長期抵抗・統一路線」であるからである。

（滝野 忠）

『旬刊社会通信No七七〇号』

灰原茂雄さん逝く

―しめやかに三月二一日告別式―

日本労働運動の金字塔、一九六〇年の三井・三池闘争の指導者だった三池労組事務局長の灰原茂雄氏が急逝された。心筋梗塞、三月一八日、享年八四歳。灰原さんは一九一五年四月七日、台湾生まれ。設計技師として鉄道会社（中国）に赴任された。

第二次大戦後、「向坂教室」の主要な担い手として三井・三池労組で活動。炭労六三闘争（一九五三年）、「英雄なき一三日の闘い」（一九五八）で昼夜分かたぬ活動を展開。六〇年の「安保・三池闘争」では、三池労組書記長として、総評の故太田・岩井氏とともに指導。その後、炭労事務局長を経、社会主義協会学習部長として階級的労働運動前進に全身全霊をつくされた。

『社会通信』のこんには灰原さんなしには考えられぬ。単行本の執筆は限らない。それにしても、向坂逸郎、岩井章、山田宏二、川口武彦、高沢寅男、近江谷左馬之介、塚元敦義、稲村稔夫氏等、大先輩の物故が相次ぐ。先輩たちは「君らに力があるのに、なぜ沈黙しているか」、「力を發揮せよ」と墓石をたたいているのではないか。晩年の灰原さんはまさにそれであった。

最晩年の灰原さんを『主権在民』の付録の「21世紀通信」はこう描いている。

まさかこの本が灰原さんの最後の本になるとは思わなかった。灰原さんを西新井の病院に見舞ったのは三月九日のことだった。そのときはベッドに起き上がり、まったくいつもの調子で元気に話された。急に入院したというので心配して行ったのだが、こちらもすっかり安心して「切るものは早く切っちゃったほうがいいですよ」と笑って別れた。

ただその際、『主権在民』の校正がやっと終わったから、もう思い残すことはないよ」と言われたのが妙に印象に残った。今となっては考えてみると、何となく気が弱くなっていたのかもしれない。

それからわずか九日後に逝ってしまった。さよならも言えなかった。さて、灰原さんのお棺には本書のゲラ刷りが納められた。灰原さんは今頃天国できつとまた校正しているにちがいない。とにかく灰原さんの校正好きは編集者泣かせで有名だった。

「社会党・総評ブロック」時代、灰原さんに「生き様」を教えられた者にとつて、灰原さんの志を継ぐことが求められる。『旬刊社会通信No.七六五号など』

灰原茂雄さんを偲ぶ

二〇〇〇年七月八日発行

発行人 滝野 忠

発行所 社会通信社

東京都渋谷区本町六丁目二八―二一九〇四

TEL 〇三―三三七七―四六四九

FAX 〇三―三二九九―五三六七